

わが町の動物たち

2 獣みち熊の里 —ヒグマ狩り—



【一】

芦別岳(1727m)中天狗山(1317m)を水源とする惣芦別川と、幾春別岳(1063m)の源流は合流して芦別湖に入る。境界の南は鉢盛山(1457m)夕張岳(1668m)の連峰で、俗に夕張山地という。芦別川の本流といわれる川は、更に、キムン芦別川、惣顔真布川、幌子芦別川、サキベンベツ川、(大滝)月見沢(奥芦別)八月沢、番ノ沢、炭山川のこれら支流を集めて空知川に合流する。幌子芦別川、月見沢、八月沢と奈井江川、美唄川の各上流の頂天に、美唄山(987m)がある。芦別、奈井江、美唄の境界山である。南には三笠市が、熊の頭の形で奔別川の上流をなして、芦別市、美唄市と接している境山(850m)は、その耳の位置である。北に上砂川、石狩川の西にはピンネシリ山(1100m)がある。

【二】

此の一群の山地は、悠久の昔から続く雄大な山容で、雪と氷の季節には白魔が牙をむき、恐ろしい朔風^{きた}が吹き付けるのみである。果てしない原生林には、ナラ、イタヤ、セン、シナ、カツラ、シラカバ、タモ、ハンノキなどが、骸骨の如く雪をかぶり、酷しい試練に堪えている。沢すじに^{ふき}路^{とう}の臺が黄色く芽吹き、山わさびや沢芹、すげ類、苔など、ところどころに青いものが見える。

遠い歴史の中で、自然の脅威と景観をなしていたこの素晴らしい原生林の容姿は、ここ十年程の間に、急速な開発のため、ただの雪山と姿を変えた。植林による若木は深い雪の下で、苦しい背伸びを強いられている。ヒグマの棲家も、年毎に変化しつつあることは、避けられない事実である。

粗目雪^{ざらめ}が、いつしか朝夕の硬雪と変わる。日中の気温は上昇し、表面を溶かして南西の風が吹くと、根雪は里から消え始め、奥山の樹林の根廻りに穴を開

ける。これが拡散すると四月の候である。この季節に大雨などが降ると、谷川すじに雪崩が発生する春の前触れである。

五十五年四月の或る日、昨夜来の雨が一日中降り続いた。その年初めての雨である。一、二月の少ない雪と、稀に見る温暖の年であった。此のような年には、ヒグマの出没が早いのも道理であろう。

山脈に風が渡ると、日毎に草木の芽が脹らみ陽溜まりの雪が崩れ、水嵩が増すと本格的な融雪期である。イタヤの枝を伐り落とすと、涙のように……甘い樹液が滴り落ち、ギョウジャニンニクの緑の芽が春を告げる。

植物、動物の活動期である。山の親爺といわれ、また、山の神ともいわれているヒグマ出没の報が各地に伝えられていた。俗に出熊の季節という。

三頭の巨大なヒグマが、この冬の少ない雪と暖気の為に棲家が水浸しになったのか、春の陽気に誘われたのか、また、暗い穴ぐらでの空腹に堪えかねたのか、いつもの年に比べて早い穴だちとなった。成年期のこのヒグマ達は、毛乾しする間も^{うと}疎ましく、碧空の空気のうまさに空腹を満たし、春の感触に酔い痴れていた。ヒグマ社会の翔^とんでる親仔か……。陽は高く昇り、辺りに身を潜める物象も少ないのに、ふる里の地の理の内で、自信に満ちた軽い足どりの散策の最中、彼らは日頃の警戒心を少しずつ忘れていった。

【三】

ヒグマは一瞬、嫌な匂いを感じた。

風が運ぶ妙なものに「ドキリ」として、犬の高鼻のような仕ぐさをした。それは、人間と油の匂いのようなだった。背すじの毛を荒ら立て、辺りを見廻したが、それらしいものは何も見当たらない。

彼は、^わ己が目が遠くを見る事に不適當であることを、知らなかったのである。ただ気配だけを察知する事に頼る以外、^{すべ}術がなかった。そこに誤算があったのである。

雪の上に、足跡が克明につけられていた。音もしない落葉の舞も、笹一葉の揺れも見逃す筈がない年輪を経た狩人「瀬の神秀山」が、此の機会をのがすわけがなかった。樹林の間に小さな目が光った。

まぎれもなくヒグマだった。それは柔和な目をしていて、凶暴の^{かげ}翳は逆光に

消えている。一瞬の静けさは、風の音をも掻き消していた。そこには、異常に緊迫した空気の流れだけがあった。返す怒涛の静まりだった。

狩人の目は、その一点に釘付けとなったが、すでにライフル銃の照準は、正確にヒグマに向けて肩甲骨を狙っていた。

寸秒の時が、長い時間を感じられた。

30,06のソフトポイントの弾丸が紫紺の炎となって大気を裂き、^{ひや}火箭となって樹林の雪原に消えた時、そこに^{かげろう}陽炎が渦巻いた。体中に異常な衝撃を受けたヒグマが最後に聞いたのは、非情な発射音と、硝煙の匂いだった。毛を逆立て怒り狂う間もなかった。

だが北国の猛獣ヒグマは、驚異の生命力を証明した。第一弾に^{たお}斃れ落ちたが、尚逃れようと必死であった。彼は幾度か、頭でっかちの動物“人間”というものを樹林の中から垣間見たことがあるが、それ程危険な動物だとは思わなかったのである。茸とりや、山菜とりに来るこの頭でっかちは、ヒグマの敵ではなかった。吾が領土をうろつくこの頭でっかちには、本能的に近寄らず敬遠していた。むしろ寛大なまなこで、遠くからただ見送るだけだった。だが今度だけは違っていた。此の頭でっかちの危険な存在を初めて、そして最後に知ったのである。黒光りする長いものを肩にかけた、この頭でっかちのまなこの底に、不可思議で不気味な光が宿っている事を……ヒグマはこの年の春まで、己が領土を吾がもの顔に振舞い、総ての動物を輩下にして、王者として君臨し、彼に敵するものは何もいなかったのである。

【四】

春風は樹林に活力を与え、根曲竹は雪を跳ね除け、^{ひだま}陽溜りの黒土には福寿草が^{つぼみ}蕾をつけて春はそこまで来ていた。

硝煙の匂いの消えぬ間も、次第にうすれていく意識のうちで、再び体中を貫く火の玉にその命運を悟ったのか、やがて美唄山へ轟く程の^{ほうこう}咆哮は、神々の座を震わせ、山岳にこだました。恐怖と畏怖の響きは^{てんらい}天籟の声であり、春雷を思わせるものであった。これを野生の叫びという。

谷風が雲を呼んで吹きあげ、爆発した野生の呼び声は、血の流れも怒りも体臭も、雪解け水の濁流に押し流されて、春の水音に掻き消されていた。遂に、

日本最大の猛獣、熊王も、八才の春を終えた。頭部から背にかけての金褐色の毛並は、見事であった。

やがて春告鳥^{うぐいす}の初音も近い。更に巨大な雄グマが、姿を現すことであろう。

【五】

ヒグマとの対決。それは閃光を思わせる短い時の間だった。生死をわけた静と動の連鎖は銃声と同時に絶ちきられ、怒る山獄の靈気は、荒々しく群青^{ぐんじょう}の天辺を押しわけて消滅していった。逆立った剛毛はいつのまにか萎^なえてしまった。その時、ふっと巨大な影がよぎったが、靈気^{かげ}の翳^{かげ}か魔性^{ませい}のかけか…。それは空の王者オオ鷲^{おおじゆ}だった。キムンカムイの昇天に対する舞であろう。

豁^{かつ}、と開かれた眼嵩^{まへ}は深く澄明^{ちようめい}で、する墨^{すみ}のようであった。その底に光るものは山獄^{さんごく}を睥睨^{へいげい}するかのよう、怨念^{うげん}の翳^{かげ}もなかった。

戦いの勝ちどきは声にならなかった。

冷然と見おろす狩人の瞳に、脱俗の慈悲の翳^{かげ}が宿る。好敵手^{たお}を斃^{たお}した安らぎの心の底に、強大な力を持つ王者に対して済度の冥福を祈る複雑な心境は、ごく自然につぶやきとなり低頭合掌となった。

山靈静まり給え、神々の恵み土に還れ。

【註】

ヒグマは、北海道、シベリヤ、北ヨーロッパ、北アメリカなどに分布し、約百種の亜種があるといわれている。そのうち、本道や南千島^すに棲むのは、エゾヒグマといわれ、凶暴性は凄まじい。三才以降は雄が大きくなるのが特徴で、体重も400キロ近くなるという。(以上北海道新聞より)

野生のヒグマの寿命は十数年といわれているが、飼育した場合は、より長く生存することが多い。

笹や雑草に覆われて、うす暗いような処に棲み、凶暴性、残忍性、陰性を秘めている。猟友会報に依れば、北海道に於ける昭和30年から53年度までのヒグマ捕獲数は、狩猟、有害駆除を含めて12,096頭で年平均504頭である。

尚、ヒグマの被害者は、死者36名、傷者は69名にのぼっている。

【あとがき】

狩猟には、失敗談や成功談などが数多いものである。しかしヒグマに於いては失敗の方が多過ぎる。此の短編は、過去幾度かのヒグマ狩りに於ける状況などの記録を基に、集成したものである。ヒグマに関しては意外と知られていないのが実状で、私も同様、未知の部分が多過ぎる。故に、ヒグマについて間違っている記述があると思われるが、御教示願えれば幸いである。

失われつつある自然環境の推移のなかで、狩とは必要悪なのかも知れない。

「この一編を吾が猟友に捧ぐ」

【野村八朔(喜代八)】

1920(大正9),4,17 群馬県小野上村～

1984(昭和59),1,29 北海道空知郡奈井江町

